

礼 拝 順 序

司 会
奏 楽

前	奏	詩編100:1-5	
招	詞	546	
讃	詠	17 詩65篇	
交	文	161	
(美	旧約 イザヤ 37:21-25 (p. 1296 or 1119)	
聖	書	新約 ルカ 23:26-43 (p. 183 or 158)	
祈	禱	242	
讃	美	「十字架(一)」	秋吉隆雄牧師
説	教	331	
祈	禱	(献金・祈禱)	
讃	美	(564)	
奉	の	542	
主	祈		
頌	栄		
祝	禱		
後	奏		
報	告		

一 次 週 礼 拝 一

説 教 「十字架(二)」
聖 書 ホセア 3:1-5
ルカ 23:26-43
讃美歌 162 234A
259

交読文 18 詩67篇

一 本 日 の 集 会 一

求 道 者 会 礼 拝 後 於 談 話 室
教 会 に 始 め て 見 え た 方 、 求 道 者
(洗 礼 を 受 け て お ら れ な い 方) は
お 集 ま り く だ さ い 。

臨 時 役 員 会

敬 老 の 会 於 二 階 ホール
昼 食 を 共 に し て 70 歳 以 上 の 方
々 の お 祝 い を い た し ま す 。 皆 さ ん
ご 出 席 ぐ だ さ い 。

婦 人 会 聖 日 例 会

ビ デ オ 鑑 賞 「 う め 子 先 生 一
百 歳 の 高 校 教 師 」

会 費 300 円

一 今 週 の 集 会 一

入 門 講 座 I
17 日 (木) 午 前 10 時
牧 師 面 会 日
17 日 (木) 午 後
入 門 講 座 I
17 日 (木) 午 後 7 時 半

一 報 告 と お 願 い 一

次 主 日 礼 拝 後 、 教 会 学 校 教 師 会
を い た し ま す 。

一 今 週 の 誕 生 者 一

一 集 会 状 況 一

	男	女	計
主 日 礼 拝 9/6	16	66	82
教 会 学 校 9/6	9	35	44
成 人 科 9/6	1	3	4
婦 人 会 9/8	1	10	11
港 南 台 集 会 9/9	1	8	9
入 門 講 座 I 9/10	1	4	5

一 牧 師 室 か ら 一

イ エ ス の 十 字 架 刑 が 決 定 し て い
っ た 過 程 で 、 私 は 民 衆 の 対 応 に 興
味 を 引 か れ る 。 イ ス ラ エ ル の 最 高
法 院 は 、 自 分 た ち が 嘗 々 と 築 い て
き た 宗 教 体 系 が イ エ ス に よ っ て 壊
さ れ る こ と を 恐 れ 、 又 民 衆 の イ エ

週 報

1992年9月13日 聖霊降臨節第15主日

卷 13 24号

1992年度教会主題

「復活の主を見る」

聖句 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」語り合った。

ルカによる福音書 24章31節～32節

- 目標 1. 生活を整えて礼拝、諸集会を守る。
2. 交わりを深めつつ、教会の新しい方向を求める。

日本キリスト教団

横浜港南台教会

〒233 横浜市港南区港南台 7丁目-8-29
電話 045-833-5323、045-833-6616
振替 横浜 9-13994

牧師 秋 吉 隆 雄

スに対する篤い尊敬と支持をねたんだ。裁判で自分を「神の子」とする神への冒瀆罪の言質を取り、宗教的罪状を死刑の理由とした。彼らはその死刑をローマの総督ピラトの手でやらせようと企んだ。宗教的罪状を、反ローマの危険分子という政治的罪状にすり替えて訴えた。ピラトは尋問するがイエスに政治的野心は認められない。ガリラヤ出身と聞いて、ガリラヤの領主ヘロデに裁判を委ねた。ヘロデは噂に聞いた力あるしるしを期待したが得られず、又政治とは無縁のただの男と見た。再度、ピラトの下で公開裁判が持たれた。ピラトはイエスの無罪を主張し、鞭打ちで釈放しようと三度も呼びかけた。しかし、最高法院は敵意と殺意に燃えて死罪を要求する。この時、民衆も声を合せ「十字架につけよ」と呼び続ける。

民衆は6日前の朝、ろばの子に乗ってエルサレム入城するイエスを「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように」と大歓迎して迎えたのに、今日は手の平を返すように十字架刑を求めた。

この変節は何なのか。エルサレム入城を歓喜して迎えた民衆と違い、今日の民衆は、朝早く最高法院に雇われ、彼らの指示通りに動く、権力におもねる民衆である。そう理解すれば納得がいく。しかし、私は同じ民衆ではなかったかと思う。6日前の民衆は、ローマ支配からの解放者としてのイエスを期待した。ところが今、目の前にいるイエスは、縄に縛られ、権力者に無残に裁かれる弱々しい、ただ以下の男である。民衆の期待が外れた時、その不満が「十字架につけよ」という叫びになった。付和雷同し、言葉を逆転させた。民衆の不定見が根本にある。もちろんイエスに癒され、神の言葉を聞いた人々は心を痛めていた。呆然と立ち尽くす人々もいたに違いない。しかし、彼らの思いは声にならなかった。

韓国の思想家・成錫憲氏は、奪われ失った言葉を取り戻し、主体的な「私」になる「考える民でこそ生きられる」と語っている。ピラトの前の民衆は、私たちの姿ではないか。